



特集

受け継ぎ、広がる義農精神

多くの村人を大飢饉から守るため、自分の命と引き換えに麦種を残した義農作兵衛。その精神は、今も町民の心に息づいています。

「義農精神」を全国に

観光資源の少ない松前町にとって、義農作兵衛は宝物のような存在。しかし、戦前は修身（道徳教育を行う教科）の教科書に掲載されるなど全国的な知名度があったにもかかわらず、今では町内でも知らない人がいるのが現状です。そこで、「義農作兵衛を再び全国の人が知る存在にしたい」「義農精神が息づく松前町の責務として、町内外の皆さんに利他的な心の大切さを訴えていく必要がある」という想いから、「義農大賞」表彰制度を創設しました。

この制度は、他者を思いやる心にあふれ、義農精神を体現する活動を継続して行っている個人・団体の功績を表彰するもの。令和3年6月に募集を開始すると、日本各地から165件もの応募があり、義農大賞は全国の人に義農作兵衛を知ってもらう第一歩に。審査委員長にタレントのアゲネス・チャン氏、審査委員に愛媛大学学長の仁科弘重氏と義農作家の早川かずし氏を迎えて審査を行い、2団体が大賞に輝きました。

このほか、町内の個人・団体を対象にした「地域功労賞」の募集も行い、1団体を選出しました。



受賞者紹介

【義農大賞】

NPO法人ゆめ・まち・ねっと
渡部達也さん

美樹さん（静岡県）



「ゆめ・まち・ねっと」は、県庁職員として児童相談所のケースワーカーなどを務めていた達也さんが、行政では一人一人の子どもの悩みや痛みに寄り添うことに限界があると感じ、県庁を退職して設立した団体です。

平成16年から活動を開始し、自由な遊び場「たっここパーク」や子ども食堂などの居場所づくりを通して、不登校や厳しい家庭環境に置かれている子どもたちを支援してきました。子どもたちの小さいけれど大切な要望に耳を傾けながら、臨機応変に活動を続けています。

郷土の偉人 義農作兵衛

元禄元（1688）年、松山藩筒井村（現松前町筒井）の貧しい農家に生まれた作兵衛は、幼いころから農業に励みました。享保17（1732）年、享保の大飢饉で餓死者が続出する中、作兵衛は休むことなく田を耕し続けましたが、ついに飢えのため倒れてしまいます。村の人が、「命には代えられぬ。その麦種を食べてはどうか」と勧めましたが、作兵衛は、「農は国の本、種子は農の基。一粒の種子が来年には百粒にも千粒にもなる。わずかの日生きる自分が食べてしまつて、どうして来年の種子ができるか。身を犠牲にして幾百人の命を救うことができたら私の本望である」と言い、麦種一粒口にすることなく後世に残し、命を落としました。

「義農精神」を後世に

作兵衛の死から44年後の安永5（1776）年、松山藩主松平定静は、作兵衛の功績を後世に伝える「頌徳碑」の建立を決定。翌年完成した碑には、「義農之墓」と刻まれました。

その後も作兵衛の精神は多



くの人々に語り継がれ、明治14（1881）年には筒井村と近隣村の有志が「義農神社」を建立。大正2（1913）年には、義農精神を受け継ぐために「義農会」が組織され、頌徳碑の建立と盛大な祭典が行われました。

昭和32（1957）年には、今の義農神社が建てられるとともに、義農公園が整備されました。それ以来、町民の憩いの場として親しまれ、現在は毎年4月23日に義農祭が行われています。令和2年からはコロナ禍の影響で開催が見送られていましたが、今年は規模を縮小して開催。役場、町議会や各種団体から約50人が式典に参列し、作兵衛の遺徳をしのびました。

【義農大賞】

特定非営利活動法人どんぐり王国
理事長 兵頭信昭さん（西予市）



「どんぐり王国」は、西予市の里山を拠点に平成2年から活動を開始。自然・動物・人との触れ合いを基本とした体験学習を通して、不登校・引きこもりをはじめとする子育て全般の支援活動を行っています。スタッフも子育ての悩みを抱えた経験者として、「深刻に悩まず、真剣に考え、まず動く」をモットーに、渦中の親子に寄り添います。

現在は里山保全活動などにも取り組み、理論ではなく自然体での体験・学びを大切にする支援を続けています。

【地域功労賞】

さくら草の会

代表

丸田信子さん（新立）



「さくら草の会」は、25年間という長い間、ボランティアで義農神社の清掃活動を続けています。地元と義農作兵衛を大切にし、子どもから大人まで幅広い層を巻き込んだ活動へと成長させてきました。

「義農精神をずっと後世に伝えていきたい」と願いながら活動が続ける、地域愛あふれる団体です。

1_ 義農大賞受賞者に審査委員長から表彰盾を贈呈 2_ 軽快なトークで会場が笑顔に包まれた受賞者インタビュー 3_ 岡本町長から地域功労賞を授与 4_ 新作能「義農」の上演。義農精神を伝統芸能で表現



1



2



3

Interview

金剛流能楽師 宇高 徳成 氏



時代背景や当時の生活を調べ、和歌などを取り入れた詞章を作ることに苦労しました。初めて見た人は難しく感じるかもしれませんが、能への理解が深まることで作兵衛の功績も能のすばらしさも同時に伝わる作品を目指して制作したので、未永く上演される作品になってほしいですね。

町ホームページ（次のQRコード）で表彰式の様子を紹介しています。大賞受賞者の活動紹介動画も掲載しているので、ぜひご覧ください。



特集「受け継ぎ、広がる義農精神」終わり

受賞者の渡部さんが、「作兵衛さんが残したのは、麦種じゃなくて人だと思ふんです」と話すように、松前町には特産品のはだか麦とともに、義農精神が根付いています。利他の心を受け継いだ皆さんこそが、この町の財産。人と人とのつながりが希薄といわれる今の時代だからこそ、私たち一人一人が義農精神を大切に、そして次の世代に伝えていきましょう。

義農精神を次の世代へ

イベントの最後を飾ったのは、金剛流能楽師 宇高徳成氏（うたか なるひでなり）がこの日のために制作した新作能「義農」の初披露です。能のうたい文句（詞章）には義農作兵衛が題材の和歌や俳句が盛り込まれ、会場の皆さんは、伝統芸能で表現される「義農」の世界を堪能していました。

続いて行われたのは、アグネス・チャン氏の特別講演「みんな地球に生きるひと」。世界中でボランティア活動が続けてきたアグネス氏は、その経験を基に、文化、習慣や考え方などの違いを受け入れて尊重し合うことの大切さを訴えました。

続いて行われたのは、アグネス・チャン氏の特別講演「みんな地球に生きるひと」。世界中でボランティア活動が続けてきたアグネス氏は、その経験を基に、文化、習慣や考え方などの違いを受け入れて尊重し合うことの大切さを訴えました。

義農大賞表彰式を開催

4月23日、第1回義農大賞表彰式が、文化センターで開催されました。